

# たどん坂

いいだよしこ

「暑いなあ」

サトルがうめいた。ユウキのハンカチも汗でぐっしょりだ。

「たどん坂だってさ」

ひと休みしながら、サトルが解説板を読んだ。

「今は階段だからいいけど、これが普通の坂だったら、転がり落ちて、たどんのように真っ黒になったんだろうなあ」

ユウキが答えた。

「ほんとに文京区は、坂が多いなあ」

サトルがぼやいた。

今日だって、湯島にある家の前の無縁坂を延々と上って、本郷三丁目からは、菊坂。これは下りだったけど、帰りはまた、上らなければならない。そして、菊坂から横丁に入ったと思ったら、急な階段が現れたというわけだ。

「やっと、着いたぞ」

てっぺんについて、二人はほっとした。しばらく行くと、

目的の真砂図書館が左手にあった。クスの木かげが涼しげで、二人はベンチに倒れこんだ。

夏休みの最中、二人がここに来たのにはわけがある。一学期の終わり、国語で宮沢賢治の「注文の多い料理店」を習った。そこで芳子先生の出した夏休みの宿題が宮沢賢治の絵本を三冊読んで、感想を書くことだった。

担任の芳子先生は、大の賢治ファンで、

「学校図書館にはないしね。湯島図書館があるけど、あんまり賢治の絵本はないから、やっぱり、真砂中央図書館かな」ということだった。

二人は、図書館に入り、まず水飲み場にとびついた。思いつきで水を飲んで、ようやく絵本の本棚にたどりついた。絵本は幼児のものだから、そのコーナーにはピンクのカーペットが敷いてある。ちょっと、恥ずかしいけど、しかたない。

「あった、あった」